

熊台交流推進講演会

～ 親日国台湾をよりよく知ろう ～

台湾の半導体受託生産企業最大手の TSMC (Taiwan Semiconductor Manufacturing Company, Ltd.台湾積体電路製造股份有限公司 :トヨタ自動車の2倍以上の時価総額を有する世界有数の企業) の本県への進出が決定し、菊陽町での新工場建設も始まり、2024 年末までの生産開始が予定されています。それに伴い、熊本と台北との空路も開設される見通しで、台湾から沢山の家族を含む技術者や観光客の来熊が予想されます。

そこで、県民に広く台湾について知る機会を提供することにより、ホスピタリティの心をもって台湾の人々を迎え、熊本と台湾の交流を更に推進するための講演会を企画しました。

講師には、日本李登輝友の会会長として日台交流の推進に努め、台湾の歴史や我が国との関りについて造詣の深い渡辺利夫氏をお招きし、台湾の発展と日台の絆の形成に寄与した日本人についてお話しいただきます。

併せて、会場ロビーにおいて、日本の台湾統治開始直後に渡台し、台湾人子弟の教育に身命を賭して当たり、今日の台湾の発展の基礎を築いた本県出身の教育者、志賀哲太郎と平井数馬に関するパネル展も開催します。多くの皆様のご来場をお待ちしています。

日時 令和4年10月2日(日) 10時～12時 (9時半開場)
場所 益城町文化会館 (益城町木山381-1 ☎ 096-286-1511)
演題 「台湾と日本のかけはしとなった先人たち」
講師 渡辺利夫氏 (東京工業大学名誉教授)
参加費 無 料

【講師・渡辺利夫氏のプロフィール】

拓殖大学学事顧問、前総長、元学長。1939年6月山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。東京工業大学名誉教授。日本李登輝友の会会長。前外務省国際協力有識者会議議長。元アジア政経学会理事長。(公)オイスカ会長。外務大臣表彰。正論大賞。

主な著書に『成長のアジア停滞のアジア』(吉野作造賞)、『開発経済学』(大平正芳記念賞)、『西太平洋の時代』(アジア・太平洋賞大賞)、『神経症の時代』(開高健賞正賞)、『アジアを救った近代日本史講義—戦前のグローバリズムと拓殖大学』、『放哉と山頭火—死を生きる』、『土魂—福沢諭吉の真実』、『台湾を築いた明治の日本人』、『後藤新平の台湾—人類もまた生物の一つなり』



この講演会は、熊本銀行「ふるさと振興基金」の助成を受けて実施されます。

主催： 志賀哲太郎顕彰会 **協賛：** 李登輝友の会熊本県支部・平井数馬顕彰会
後援： 益城町・熊本県・宇土市・菊池市・菊陽町・RKK・TKU・KKT
(一財)ふくおかフィナンシャルグループ文化芸術財団・熊本日日新聞社

熊本と台湾の交流にゆかりのある4人の偉人

● 志賀哲太郎（しが てつたろう : 益城町）



志賀哲太郎は、益城町津森の出身。鍛冶屋の長男として生まれたが、その資質を認めた周囲の人々の支援を受けて成長し、東京の明治法律学校で学んだ後、九州日日新聞（熊本日日新聞の前身）の記者となり、佐々友房や古庄嘉門、安達謙蔵らと政治活動を展開した。後に、教育者として転身。菊陽町の原水学園や大原義塾で教鞭を執った後、明治29年に渡台。台中市大甲区で初等教育に半生を捧げ、今日の台湾の繁栄の礎となった多くの人材を育成した。教え子達がやがて民族自立の精神に目覚め反政府活動が激化していくにつれ、台湾文化の尊重を主張する志賀は、漢文教育全廃を進める総督府との間に軋轢を生じたこと等から終に自害するに至る。志賀の精神を知り、その死を悲しむ教え子や地域の人々は、志賀を前例のない道祭（神の葬儀）を以て送り、葬儀の列は1kmに及んだと言われている。大甲の人々は、今も、志賀を「聖人」として慰霊と顕彰を続けている。

● 湯（坂井）徳章（とう とくしょう : 宇土市）

湯徳章は、日本人の父・坂井徳蔵（宇土市出身・警察官）と台湾人の母・湯玉の長男として台南で生まれた。台南師範学校を中退して台南州巡查となるが退官して日本に渡り、中央大学法科で学んで難関の高等文官試験「司法科」「行政科」の両方にパスし、台湾に戻って弁護士となる。台南市南区区長、台湾省参議会候補議員、台南市人民自由保障委员会主任委員、二二八处理委员会台南市分会治安組長を歴任し、次期台南市長と目されていた。日本の敗戦後、大陸から中国国民党軍（外省人）が来て台湾を接收。人々は当初は歓迎したがやがて失望。本省人と内省人による大規模な内戦・二二八事件に発展した。湯は、1947年3月、国民党に逮捕され、拷問と市中引き回しの後虐殺される。彼は最後まで同志活動家について口を割らず、台南の有力者の多くが命を救われた。台南市では、湯を「台南の英雄」として顕彰し、命日の3月13日を「正義と勇気の記念日」とした。公開処刑された場所は「湯徳章記念公園」となり、その遺徳を偲ぶ場とされている。



● 平井数馬（ひらい かずま : 熊本市）



西南戦争の後、大陸との交流の進展を予見した佐々友房は、濟々巒に朝鮮語・中国語科を設置。濟々巒の伝説的秀才で中国語に堪能だった平井は、明治28年8月、台湾総督府通訳官として台湾に渡った。明治政府は、日清戦争後に割譲された台湾に近代教育の礎を築くため、全国から6人の優秀な教師を選任して派遣したが、平井もその一人として選ばれた。6人の教師は翌年の元旦、台湾の匪賊に襲われて全員が惨殺されてしまう。平井は弱冠17歳だった。この事件は、学堂があった地名により「芝山巖（しざんがん）事件」と呼ばれているが、身命を賭して教育に当たった信念が台湾の人々に影響を与えたばかりか、日本からも彼らの遺志を継ぐべく、多くの教師が次々に渡台することとなった。台湾の近代教育の魁となったこの6人の教師は、今も「六氏先生」として台湾の人々の尊敬を集めている。平成21年9月、台湾の李登輝元総統は熊本市を訪れ、小峰墓地の平井数馬の墓前に献花し、参拝された。

● 西郷菊次郎（さいごう きくじろう : 菊池市）

西郷菊次郎は、西郷隆盛の奄美大島潜居時、現地有力者の娘・愛加那との間に長男として生まれた。西南戦争では薩軍に付いたが負傷して投降。隆盛の弟・従道（つぐみち）の計らいで米国留学等を経て明治政府の官僚となる。明治28年に渡台し、台北県支庁長、宜蘭庁長を歴任。「西郷堤」に象徴される宜蘭川の治水など、「敬天愛人」の父の遺訓に従い、住民生活の安定化に腐心し、様々な分野で善政を布いたと言われる。西郷家の先祖が肥後国菊池家の家臣（元禄年間に島津家家臣となる）であったことから、菊池市では、西郷菊次郎が初代庁長を務めた宜蘭市を市長や市議らが訪問するなど、友好交流を深めている。

